

北川雄光（監修）
宮澤光男，竹内裕也（編集）

消化器内視鏡外科手術バイブル 動画で学ぶハイボリュームセンターの手技

平野 聡

北大大学院教授・消化器外科学/北大病院副病院長・消化器外科Ⅱ科長

「手術は手術室に行って覚えよ」とは、外科医にとって絶対的な教えであった。あえて術野に入らない立場で、術者や助手の一挙手一投足を目に焼き付け、その手術室の雰囲気を含めて肌で感じることは、「手術が上手になりたい外科医」にとって必須の行いと目されていた。しかし本書は、その不文律を塗り替えるかのごとき大著である。

「コロナ禍」により移動が制限された数年間を経験し、さらに働き方改革で外科医の時間の使い方に変化が生じる中、多くの修練医がエキスパートによる手術映像を渴望している。確かに、昨今、外科系学会では多くの手術動画が供覧されるようになったが、短時間の口演では繰り返し学習は困難であり、エキスパートの考え方やデバイス選択の理由など、詳細情報を欠くことが常である。そのような背景を的確に認識し出版されたのが本書であり、消化器内視鏡手術全般を、実に368本を数える動画と豊富な紙面情報により読者にオ

ンデマンドで提供してくれる点において他に比肩するものがない。

現在、臨床現場では腹腔鏡・胸腔鏡手術とロボット支援手術が各領域でさまざまな比率で選択されているが、本書はそれぞれのアプローチ法を実施の頻度によって適切に選択して掲載している。その関連情報として、ポート位置や使用デバイスはもちろん、術者のポジションやナースと器械台の位置まで、はたまた、ロボットのペイシメントカートの方向に至るまでが全編を通して同じイラストで示されている点で、読者への細かな気配を感じる。さらに、本書の最大の売りである手術動画も、誌面の中にQRコードが適切に配置され、収録時間も数分程度に集約されており、本文の文字情報との相性もさることながら、スマホ片手に動画を連続して閲覧することで、術前の手術イメージ作りにも絶好である。

本書編さんの目的として「全ての消化器内視鏡外科医に高いレベルの手術を」という命題が掲げられてい

るとおり、対象となる読者層は極めて広い。手術のセッティングやエキスパートの手さばき一つひとつは初学者や技術認定をめざす者にとって珠玉であり、デバイス選択やテクニックの詳細は自施設の方法を進化させようとしている指導者にも格好の情報である。また、食道癌における反回神経・大動脈・気管浸潤例などが「高難度」手技と明示して独立掲載されており、熟練者といえども思わず本書を手に取り、動画を開きたくなるはずである。

紀元前から人は老若男女にかかわらず、何か悩みがあるたびに「聖書（バイブル）」をめくっていたと言われる。本書は若手からベテランまで、その技術の成長を導くものとして、現代における真の「手術バイブル」である。

●B5/頁 336/2023 年 03 月

定価：13,200 円

（本体 12,000 円＋税 10%）

[ISBN978-4-260-05052-4]

医学書院 刊